良順教育賞を受賞して

長崎大学病院　循環器内科・講師
昭和62年卒　小出（こいで）　優史（ゆうじ）

今年度で10回目を迎える良順教育賞を今回受賞させていただきましたことを大変うれしく、また光栄に思います。これまで多くの方々にお世話になりながら教育活動を行ってきましたが、私一人では充実した活動は出来なかったと思っております。この場をお借りして今もお世話になっている多くの皆様に今回の受賞をご報告すると共に心からお礼を申し上げます。

私は青雲高校から長崎大学へ入学し、教養教育･基礎医学・臨床医学と学ばせて頂きました。私自身の学生時代を考えますと、当時から教育熱心な先生は沢山おられましたのに、あまり熱心とはいえない学生であったと自認しております。病室実習も、医療の実際の現場にいながら漫然と過ごしてしまい、何とも勿体ないことをしたものだと思っております。

昭和62年に医学部卒業後は、長崎大学第三内科（現・循環器内科）に入局し、橋場邦武教授の下、奥保彦先生を指導医として、大学病院の７階病棟で循環器内科医というよりは、まずは医師としての研修が始まりました。入局当時、まだ何もできない私は、医局の諸先輩に夜遅くまでご指導頂き、医師としてのイロハから丁寧に教えて頂きました。当時は今のように確立した研修医教育システムはありませんでしたが、２年目の半年間を過ごした長崎原爆病院では、出身医局以外の疾患を主に持たせて頂き、胃透視や胃カメラなどを多く行いましたし、内科医としての総合的な研修が出来たと思っております。橋場教授からは「１年目と２年目の医師の技量の差は大きいものがあるが、10年目近くになると１年の差は小さなものになってくる。しかし、20年目でも30年目でも１年下の後輩との差を保てるように努力をしないといけない。」と最初の同門会主催の歓迎会で教えられました。それ以来今日に至るまで矢野捷介前教授、前村浩二教授をはじめとする諸先輩方の背中を見て、追いかけているうちにいつの間にかこの年になっている次第です。これまで、佐世保中央病院では当時の三宅清兵衛院長の号令の下、総合内科専門医を取得し、その後循環器専門医も取らせてもらいましたし、瀬戸信二先生のお計らいにより米国での勉強の機会に恵まれた事は、その後にとても大きな良い影響を与えたと思います。

私は、日々の研鑽は学生・研修医・専攻医にだけ当てはまるものではなく、医師として仕事をしていく全員が心得ておかねばならないことであるとも思っておりますし、日進月歩の医療の世界では、これで十分という事はないと思っております。また一方で、医療は技術の伝授も大切であり、マニュアル化されてきた現在の医療においても、手術や治療手技に関しては、留学をしたり見学に行ったりして先進的技術を学んでいるのが現状ですし、「俺の背中を見て育て」とか「技術は見て盗むもの」との考えは現在も残っていると思います。

いつしか教育をする立場が少し強くなってきているようには感じますが、私としましては、教育を行うだけでなく、教育を受け自己研鑽が必要な側でもあるということは常に忘れていないつもりです。その意味では、研修医や専攻医、特に他領域に進んだ先生は、たとえ卒後数年しか経過していなくても私に教えを授ける先生、師として接していかなくてはならないと思っております。今後も多方面の師に巡り会いながら自分を高めて行きたいと思いますし、機会があればそれをまた誰かに伝授していけるようになれば至幸の極みと思っております。

学生や研修医の先生との会話で私は時々「いつか私の主治医になってもらわないといけないので、しっかり勉強してよね！」と言っております。安心して我が身を任せられる次世代を担う臨床医を育てていけるよう今後も医療教育を行っていきたいと思っておりますが、その為には長崎大学同門の皆様のお力無くしては出来ません。みんなで力を合わせて次世代の医療を担っていく若者を育てて行けたらと思っておりますので、今後もよろしくお願いします。